

在宅要介護高齢者の家族介護者における意思尊厳尺度の構成概念に関する検討

○ 東京福祉大学 金 貞任 (3868)

金 貞任 (東京福祉大学・3868)、山田 花子 (東京都立大学・4670)

キーワード3つ：尊厳尺度・家族介護者・在宅要介護高齢者

1. 研究目的

高齢者を介護する時の意思尊厳は、高齢者自身の意思決定を尊重する点で重要であり、自宅で提供される介護においては、介護が必要な高齢者の意思尊厳が十分に守られていない状況が見受けられる。介護保険法第一条では、「要介護状態の者が尊厳を保持し、その有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるようにする」ことが定められている。臨床における尊厳について、医療従事者の多くは患者の尊厳を向上させたいと考えているが、尊厳が明確な概念として認識されない限り、実際の臨床現場で優先されることはない」と指摘している (Shotton・Seedhouse, 1998)。この見解は、自宅での介護においても同様である。要介護状態にある高齢者が自宅でその人らしい日常生活を送るためには、家族介護者が要介護者の意思を確認し、その意思に基づいて尊厳を持って介護することが重要である。一方で、尊厳に関する研究は主に医療関係者を対象に進められているが、近年高齢者施設における研究がいくつか行なわれている (市浦ハウジング&プランニング、2016；多賀、2022)。しかし、自宅で介護を提供している家族介護者を対象とした尊厳に関する研究はほとんど存在しない。本研究は、自宅における家族介護者による要介護高齢者の尊厳尺度の信頼性と妥当性を検討することを目的とするものである。

2. 研究の視点および方法

本研究の調査地域は、群馬県 A 市、過疎地域、及び静岡県 B 市である。調査対象者は、自宅で要介護度認定を受けている高齢者の中で、主に要介護高齢者に介護を提供している家族介護者である。調査の実施期間は、A 市と B 市において 2022 年 11 月から 2023 年 3 月まで、過疎地域においては 2023 年 3 月～5 月であり、調査員による留置調査法で実施した。分析対象者は、705 ケース (回収率 92.6%) である。意思尊厳尺度は、14 項目 (「要介護高齢者の意思を確認し、気持ちを尊厳する」「要介護高齢者の手に触れるなどのスキンシップをする」など)、4 選択肢からなる (「ほとんど当てはまらない」～「おおむね当てはまる」)。本研究のすべての統計処理には、SPSS Ver 28.0 及び Amos Ver 28.0 を使用した。

3. 倫理的配慮

本報告の個票データは、個人を特定できないように設定した。調査の実施にあたり東京福祉大学の倫理・不正防止専門部会の承認を受けて実施した (承認番号：2022-06)。本発表に開示すべき COI はない。

4. 研究結果

本研究における調査対象者は、男性 176 名 (26.0%)、女性 494 名 (72.9%) であった。要介護高齢者との続柄は、配偶者が 230 名 (33.9%)、息子が 108 名 (15.9%)、娘が 221 名 (29.8%)、息子の妻が 94 名 (13.9%) であった。

自宅の要介護高齢者の意思尊厳尺度の検討のために、まず、「意思尊厳」については、因子負荷量 0.40 以上を採択基準とし、因子分析を行った結果、4 因子 14 項目が確認された。第 1 因子は 5 項目から構成され（「要介護高齢者の意思の確認と気持ちを尊重」「手に触れるなどのスキンシップ」など）、「自尊心尊重」と命名した。第 2 因子は 4 項目から構成されており（「趣味などができるように配慮」「生きがいを持てるように働き」など）、「社会生活尊重」と命名した。第 3 因子は、3 項目から構成されており（「嫌がるサービスを行強しない」「一人でできるように配慮」など）、「自己決定尊重」と命名した。第 4 因子は 2 項目から構成されており（「介護費を本人の金で払う時に同意を得る」「生活費を本人お金で払う時に同意を得る」）、「経済的尊重」と命名した。次に、「意思尊重」のそれぞれ 4 因子 14 項目について、Cronbach の α 係数は、尺度全体で 0.89、Cronbach の α 係数は 0.75 から 0.97 であった。最後に、確証的因子分析の結果、モデル適合度は「意思尊厳」14 項目について、GFI=0.891、AGFI=0.839、RMSEA=0.068 であった。

5. 考察

家族介護者による要介護高齢者の「意思尊重」に関する尺度において、全ての因子について Cronbach の α 係数は 0.80 以上を示しており、これは良好な内的整合性を示す結果と考えられる。さらに、確証的因子分析においては、「意思尊重」の RMSEA が 0.068、GFI が 0.89 であることから、一定の妥当性が確認されたと考えられる。本研究では、「意思尊厳」の因子数が 4 因子抽出され、それぞれ「自尊心尊重」「社会生活尊重」「自己決定尊重」「経済的尊重」と命名した。これらの因子は、要介護高齢者の「意思尊厳」に関する多くの側面を含んでおり、自宅で生活する高齢者の尊厳を一定程度捉えることができていると評価される。以上のことから、自宅の要介護高齢者の尊厳への思いを測定するための信頼性と妥当性は確保された尺度だと考えられるが、本尺度はまだ不十分な点もある。今後は、さらなる研究を通じて尺度の改良や適用範囲の拡大を図ることが重要である。

引用文献

- 市浦ハウジング&プランニング、2016「高齢者の尊厳の保持と制度の持続可能性確保を両立させる介護保険施設の整備のあり方に関する研究事業」報告書
- Shotton L, Seedhouse D. 1998. Practical dignity in caring. *Nurse Ethics*. 5(3):246-255.
- 多賀 努、2022「認知症になったらあなたの「尊厳」は傷つきますか？」東京都健康長寿医療センター研究所 <https://www.tmghig.jp/research/topics/202212-14682/20250525>
- 本研究は、JSPS 科研費 JP21K01998 の助成を受けて実施した。